

《放射能》言説は、いま、どう整理しうるか？

車田 研一 (Kenichi Kurumada)

独立行政法人国立高等専門学校機構 福島工業高等専門学校

これはきわめて個人的な体験ではあるが、2011年3月11日の大地震と津波の直後に福島県浜通り地域で発生した原子力発電所の事故がもたらした様々な社会現象を、自身でその域内の居住者として直接的・継続的に目の当たりにしたことは、「科学的知見」をベースにして作動している現代の社会環境に常時身をおいている我々が無意識に持つ思考形態に潜む様々な認識様式の断面を強烈に感じさせる忘れ難い契機となった。原子力利用システムは平常時におけるその内部工程の極端な不可視性と、その生産物である電力がもたらす一見単純なまでの表面としての「利便」の現象的明快さから、ふだんは我々にとって極度に外在的なシステムであり続ける運命におかれている。明らかに、これは一般に原発稼働の是非の議論が不毛になる根本的な要因である。また、通念的なイメージとは異なり、これは原発立地等の外面的要素とは全く関係がなく、原発立地での居住と原子力発電システムに関する知識や理解の多寡は全く相関しない。

原子力発電システムがあればどこまで劇的に可視的かつ物理的な破壊を露わにし、さらには爆発というシステム内部の「秘密」を文字どおり外界へ晒す事象が起きたとき、それまではどこかに嚴重に仕舞い込まれていた、この極度に「科学技術的」なシステムをめぐる夥しい言説が一気に噴出し、ほとんど裸形のままに巷間を飛び交った。

多くの自然あるいは人工システムに生じる災害とは異なり、原子力災害は、災害としては（爆発や火災等の直接的な事象の至近にいた場合等の例外を除き）原則的には完全に不可視的である。このため、事象が「災害」としての意味論的な性格を具えるためには、必然的に「科学的な説明」という人為的なプロセスを辿ることが要求される。大地震や津波に因る可視的な災いとは対蹠的に、原子力災害は、「外在主義的、かつ、甚だ仮説的で確率論的な予見言説」への人々の反応様式として現れる。すなわち、原子力災害における被災者の行為は、極めて被移入的な相貌をまとった、さらに、仮想的ではあるけれども、同時に規範的な、科学的に言語化された理由により駆動されざるを得ず、結果的に被災者の行動指針は「科学的な説明」という一種の強制的な力場の下におかれる。いわば、災害域内の人々が原子力災害をクリティカルな事象として内在主義的に受容し、続いて彼等の思考プロセスのなかで処理し、最終的には何某かの行動への判断に至るためには、知覚可能な事象の直接的な経験を全く経ないまま、ただひたすらに外在的であるよりほかはない「科学的な知識」のみを通し、原子力災害に対する恐怖型の信念を持つことを要求される。よく知られた思考実験になぞらえれば、『*brain in a vat* (H. Putnam)』での信号入力を、必ずしも発信元が明確化されていない言語活動のみを介して行うという、非常に稀な社会実験例だったといえるのかも知れない。（むろん、ここでの実験という語使用は、Putnamの思考実験、という表現に由来している。）

このような災害の認識様式は、Bonjour が言及するところの『認知的自発信念

(cognitively spontaneous belief)』[引用書 p. 58] による、災害への恐ろしい認識が高確率をもって直接的に発生することが期待されるような通常の自然あるいは人工災害のそれとは、著しく異なっている。『放射能』という語は、元来は単に或る物理的な特質を表すに過ぎないが、これまでの様々な経緯を経て附加されてきたニュアンスを加味して考えると、原子力災害の中核にあるものを、表意的に「放射能」災害と表記してもよいだろう。むしろここでは、「放射能」という語は、ひとつのメタファーとして、外在主義的な科学的知識を、恐怖感情あるいは「それが恐怖すべき対象である」という認知的自発信念へと変換する「意味論的な装置」であると考えられる。

2011年の「放射能」災害の際、災害の域外からみれば、避難指示の号令とともに一斉に当該域内の人々が退去したかのように思われたであろうし、その後しばしば広く報道されることになった福島県双葉郡北部の映像群は上記の「放射能」災害サイトの無人地帯化のイメージを増幅させたのだろうが、実際には、そこには多くの人々が居続け、日々の犬の散歩や生活用水の水汲みをしていたのである。すなわち、犬が散歩へ行ったがって吠えている、あるいは、生活に必要な水のストックが減ってきたので給水スポットへ水を取りに行く必要がある、等の実感的な規範的理由の「外側」で、完全に外在主義的であるとしきれないような「放射能」をめぐる言説が日々轟々と鳴り続けるという、認識の重心が内外へ極度に引き裂かれた状況が長く続いた。しかし、おそらく域外では、この分裂そのものが不可視かつ不可知のようになってしまったように思われる。

当事者としては、そのような分裂した力場は、日々の生活を送るうえでたしかに大きな苦痛を感じさせるものだった。そのため、その分裂に因る苦痛自体を中核とした分析、あるいは、その視座の分裂を完全に捨象した「放射能」起因の社会的現象の分析がその後なされることが多く、その傾向は現在でも大きくは変わっていない。しかし、その双方とも、「放射能」災害をめぐる生じた言説群総体の特質を捉えることはできていない。「放射能」災害の正体は、通常の人間の内在主義的な「生活のための知識体系」を穿つほどの圧倒的声量で供給される「外在主義的な科学的知識」が発生させた何かであることは間違いないのである。このとき此岸／彼岸を分けるものは、「知識の多寡」ではなく、ただ上記の「供給」のベクトルの方向を決めるための域内・外の分割である。

問題は、科学的技術や科学的知識といわれるものが社会実装され、実際に人々の生活へ裸形の影響を及ぼし始めるとき、それらの知識や技術の発生点や成長点からは大きく離れた「ふつうの人々」に対して、彼等にどのような「外在主義者」として居てもらうように要請できるのか、あるいは、そもそもそのような要請が可能であるか、という点にある [引用書 p. 40]。この問いこそが、科学技術が潜在的にもたらしうる甚大なリスクをめぐる科学哲学が最も真剣に取り組むべきところであろう。このクリティカルな問いに解答を出すことは非常に困難ではある。だが、おそらくはそのとき域内に居たがゆえに間近で見ることができた「放射能」をめぐる様々な言説群の記憶を頼りに、将に期せずして実施されてしまったこの「実験」の結果の考察として、社会実装化巨大技術をめぐる知識の外在主義に課されることが顧慮されるべき「条件」を試行的に議論したい。

【本文中引用文献】 L. Bonjour, E. Sosa “Epistemic Justification” ISBN: 978-0631182849 (2003, Wiley-Blackwell). <バンジョー・ソウザ著 上枝美典訳『認識的正当化: 内在主義対外在主義』 ISBN: 978-4782801574 (2006 産業図書)>